

# 結婚移住女性の異文化適応過程

—子どものいない事例を通して—

一條 玲 香\*

上 埜 高 志\*\*

本稿では、不妊治療を経て子どものいない生活を選択した結婚移住女性Aのライフストーリーの聞き取りを通して、異文化適応プロセスを明らかにした。不妊治療中は、同じ文化的価値観を共有する同国人に気持ちを受け止められることが支えになっていた。しかし時間が経つと、日本で子育てをする同国人たちとの間に価値観のズレが生じるようになった。同国人との関係が徐々に疎遠になる一方で、日本語教室、仕事を通じた日本人や他の外国人とのネットワークが強固になっていた。最終的に、Aは日本社会の中で、自分らしく、外国人として生きることを選択していった。

Aの事例から、子どもを通じた日本社会との関わりはないものの、地域社会でのネットワークを構築してきたことが、Aの日本での居場所や社会参加に影響を与えていることが明らかとなった。また同国人とのつながりだけでなく、日本人とのつながりがAの自分らしく、外国人として日本で生きることに繋がっていることが明らかとなった。

**キーワード：結婚移住女性、異文化適応、日本人の配偶者、国際結婚、不妊治療**

## I 問題と目的

法務省(2016)によると、平成27(2015)年度末の在留外国人数は、223万2189人に上り、過去最高を記録した。在留資格等別では、永住者が70万0500人(31.4%)と最も多く、過去10年間で倍増している(法務省2006, 2016)。人々の国際移動が活発になる中、今後も日本に長期居住する外国人は増加していくことが予想される。

日本に長期居住する外国人は、日本人との結婚によって日本に滞在することになった人が少なくない。日本人と結婚した外国出身者の在留資格は、日本人の配偶者等から永住者になることが多く、さらに人によっては日本国籍を取得するため、その数を把握することは難しい。しかし、外国人単純労働者の長期滞在を厳格に制限している日本では、新規流入外国人に占める婚姻移動の割合が高いとされる(落合・カオ・石川, 2007)。国際結婚は、1990年以降「夫日本・妻外国」の組み合わせが7～8割で推移している(厚生労働省, 2015)。つまり、長期居住の外国人には、日本人男性と結婚した外国人女性(結婚移住女性)が多く含まれていることが推定される。

---

\*教育学研究科 博士課程後期

\*\*教育学研究科 教授

日本に滞在する外国人を対象とした心理学的研究は、留学生を扱った研究が多く、結婚移住女性を扱った研究は数少ない。また精神科を受診した患者を対象とした研究など、問題がおこった事例を取り上げることが多かった(橋爪ら, 2003; 許, 2010; 桑山, 1995)。そこで、筆者は日本に10年以上滞在している結婚移住女性たちの振り返りを通して、異文化適応における困難とサポート因について考察をおこなった(一條, 2015)。そこから、子どもをきっかけとした自身の心理的成長、社会的機会の拡大、家族以外の社会との繋がりが異文化適応のサポート因となることが示された。出産・子育てをリスクとしてのみ捉えるのではなく、日本社会への参加度を高める機会と捉えることの重要性を指摘した。また大友・飯田(2016)も、母親の異文化体験において、子どもの存在が肯定的な意味づけや肯定的な体験と関連しており、異文化への適応意欲や自助資源に繋がるとし、武田(2011)も子育てを通じた社会的ネットワークの形成に言及している。さらに大野(2013)は、PTA活動という母(妻)という役割を通して社会へ関与し、その社会的な存在意義、市民としての意識を形成していると指摘する。このように結婚移住女性が子どもを通じて、社会参加していく事例は多くみられる。

一方で、子どもがいない場合の社会参加や異文化適応は、どのようにして進んでいくのかという課題が残る。そこで、本稿では、子どものいない事例に焦点を当て、どのように異文化適応や社会参加が促進されていくのかそのプロセスを明らかにすることを目的とする。子どものいない結婚移住女性の異文化適応過程を通して、その阻害要因と保護要因について明らかにする。

## II 方法

### 1 研究協力者

研究協力者は、日本滞在年数が10年以上の日本語で面接可能な結婚移住女性とした。また異文化適応の臨床基準として、CES-D (Radloff, 1977)の日本語版において16点以上の抑うつが疑われないことを条件とした。本稿では、子どものいない1名の事例を対象とする。

### 2 調査および分析方法

1対1の半構造化面接によりデータを収集した。面接は、本来研究協力者の母語でおこなうことが望ましいが、筆者の外国語能力及び研究協力者の日本語能力を勘案した結果、日本語により面接をおこなった。研究協力者は、日常的に日本語を用いて仕事をしており、面接可能な日本語能力を有していた。

収集したデータは、TEA (Trajectory Equifinality Approach 複線経路等至性アプローチ)のTEM (Trajectory Equifinality Model 複線経路等至性モデル)によって分析を行った。安田(2015)によると、TEAは、時間の流れとシステムを捉えるという特徴をもった、過程と発生を捉える質的研究法として発展してきた。TEAもTEMも等至点(Equifinality Point: EFP)を主要概念とする。サトウ(2015)によると、この等至点という概念は、ベルタランフィによるシステム論の開放系(オープンシステム)は等至性をもつ、というテーゼに依拠しているものであり、ひとつのゴール・目標に対

して複数の異なる経路を想定しうる、ということを表わしている。この等至点にいたる複数経路を描く方法がTEMである(サトウ, 2015)。

### 3 手続き

調査期間は、2015年6月～11月であった。研究協力者は、紹介、個人的な知り合いを通じて依頼した。謝礼として、研究協力者には、1回の面接ごとに謝礼を渡した。

面接は、3回に分けて行なった。1回目の面接では、研究への同意を得た後、インタビューガイド(表1)をもとに、来日経緯から現在に至るまでのライフストーリーの聞き取りをおこなった。面接内容は、許可を得てICレコーダーに録音した。

表1 インタビューガイド

質問項目
・年齢(現在, 来日時, 結婚時, 出産時等)
・滞在年数
・職業
・来日経緯
・来日以前の日本の印象, 来日直後の日本の印象
・結婚経緯(双方の親の反応, 当時の心境)
・言葉の困難さ(日常生活に支障がなくなる時期)
・文化差について
・出産/育児/教育について
・社会参加について(仕事, 地域活動等)
・友人について(日本, 母国)
・家族について(日本, 母国)
・将来展望

次に、録音から逐語録を作成した。意味のまとまりごとの要約をカードに書き起こした。出来上がったカードを時系列に並べ直し、出来事とその背景に分けて、TEM図を作成した。2回目の面接では、作成したTEM図を用いて筆者が説明を行なった後、研究協力者に順序や要約した項目に間違いがないか確認してもらいながら、さらなる聞き取りをおこなった。3回目の面接では、2回目の面接をもとに修正したTEM図の確認をおこなった。以上の手順でTEM図を完成させた。

### 4 本研究における等至点

本研究の目的は、結婚移住女性のライフストーリーの分析を通して、異文化適応過程を明らかにすることである。したがって、本研究における等至点は、「異文化適応する」ということになる。

異文化適応の定義や指標については、さまざまな議論があり、研究者間で一致していないとの指摘がある(高井, 1989)。留学生の異文化適応研究についてまとめた譚・渡邊・今野(2011)によると、異文化適応の定義には、適応を調和のとれた好ましい状態として捉えている静的なものと適応を過程と捉える動的なものがあるが、いずれにせよ個人が新しい環境に自分を合わせていくという点で

一致しているとする。そして、異文化適応の定義を「個人が異文化で心身ともに概ね健康で、強度な緊張やストレスにさらされていない状態」としている。

また鈴木(2012)によると、異文化適応とは、「個人が新しい環境(異文化やそのメンバー)との間に適切な関係を維持し、心理的な安定が保たれている状態、あるいはそのような状態を目指す過程」であるとされる。

この「個人が新しい環境に合わせていく」、「個人が新しい環境との間に適切な関係を維持」するという点について、より詳しく述べるならば、「自文化」についての視点が必要である。Berry & Kim (1988)は、異文化適応を考えるうえで、文化変容ストラテジーを提示している。文化変容ストラテジーとは、個人の異文化と自文化に対する態度(肯定・否定)により、異文化にも自文化にも否定的である場合には「周辺化」、異文化に否定的で自文化に肯定的な「分離」、異文化に肯定的で自文化に否定的な「同化」、異文化、自文化ともに肯定的な「統合」に分類される(表2)。そして、異文化適応や精神的健康においては、「統合」が最も理想的とされる(井上, 2001)。Berry & Kim (1988)に依拠すれば、異文化適応とは、異文化適応を個人が一方的に異文化社会に合わせるのではなく、自文化と異文化を統合していく過程と定義できる。

表2 文化変容ストラテジー

		自文化	
		否定	肯定
異文化	否定	周辺化	分離
	肯定	同化	統合

また賽漢(2011)においては、価値観や文化を規定する準拠集団、準拠枠の変更として捉えられている。国際結婚では、当初ホスト社会の準拠枠と結婚移住女性の準拠枠が異なるため、衝突が起こる。しかしホスト社会側が準拠枠を緩めたり、結婚移住女性が日本人の家族や地域の日本人女性たちといった新しい準拠集団に属することによって、準拠枠を変更することで、解消されうるとしている。この新しい準拠集団に属するということは、居場所を得るということとほぼ同義と捉えることができる。結婚移住女性たちは、全く関係性がなかった日本社会において、夫との夫婦関係、義父母や子どもとの家族関係、地域の人々との社会関係を作り、居場所を築いていく。この全く関係が存在しなかった異文化社会において、様々な人間関係を作り、居場所を築いていくことを異文化適応過程と捉えることができる。

本稿では、上記の定義を踏まえ、異文化適応を静的には心身が健康であり、動的には異文化と自文化を統合しつつ、新しい社会において様々な関係性を構築しながら、自らの居場所を築いていく過程と定義する。




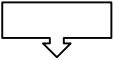
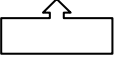
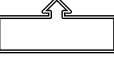

また本研究においては、等至点ではなく等至域という概念を使用する。田垣(2009)は、障害受容

を例にあげ、障害受容には、完治の断念、障害の医学的理解、社会的に望ましいとされることに取り組むことなど多様な意味をもっており、点として図示された場合には、このような多様性がわかりづらくなると指摘する。社会科学の概念自体が多様性を持っていて、「点」によって表しにくい(田垣, 2009)。異文化適応も、心理的安定や自文化と異文化の統合、居場所の獲得などさまざまな意味をもっている。さらには、変化する状態として捉えられるものなので、「異文化適応に達した」というように点として捉えることは難しい。したがって本研究では、図の上部を適応域、下部を不適応域と設定し、図示することとする。

### 5 TEM における用語と概念

TEM に用いる用語と概念について、安田・サトウ (2012) より、表3にまとめた。この他、選択した経路は実線で、選択しなかった経路は点線で描かれる。図における横軸は、時間の経過として、縦軸は、下が両極化した等至点、上が等至点として使用される。

表3 TEM における用語

概念	TEM 図での表記	説明
EFP 等至点		個々人が固有な経路をたどっても、時間経過のなかで、等しく到達するポイント
P-EFP 両極化した等至点		等至点に対する理論的な補集合
BFP 分岐点		その人を等至点へと導くうえで何からの迷い複雑性が生じる点
SD 社会的方向付け		等至点から遠ざけようと働く力
SG 社会的ガイド		等至点へ至るように働く力
SPO 統合された個人的志向性		個人の内的な欲求や意志
OPP 必須通過点		多くの人がほぼ必然的に通らなければならない地点(制度的・習慣的・結果的)

### 6 倫理的配慮

研究協力者には、調査同意説明文書を用いて、①研究目的、②研究計画、③研究方法、④研究による不利益、⑤個人情報保護、⑤研究結果の公表、⑦問い合わせ先について説明し、研究協力への同意文書に署名を得た。なお、本論文の公表にあたって、研究協力者に改めて了承を得た。

本研究計画は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会により承認を受けた(承認ID:15-1-001)。

### Ⅲ 結果

#### 1 研究協力者Aのプロフィール

研究協力者Aのプロフィールを表4に示す。Aは、南米出身の日系3世で、50代、滞在年数は20年である。現在は、通訳や相談員など非常勤の仕事をしている。

表4 Aのプロフィール

研究協力者	A
出身地域	南米
在留資格	永住
年齢	50代
結婚年齢	30
滞在年数	20
結婚経緯	研修→恋愛
義父母との同居	なし
職業	非常勤
子の有無	なし

#### 2 第I期：出稼ぎ、留学そして結婚

来日から結婚までを第I期として、図1に示した。Aは、20代半ばに日系2世である両親と弟とともに、家族で日本に出稼ぎにやってきた。Aは医療系の専門技術をもっており、開業資金を貯めるために日本にやってきた。当時は、仕事だけの生活で日本にも興味がなかったという。日系コミュニティの中で生活するので、日本人との接触もなく、日本語が必要なときは両親が通訳をした。青春時代、母国の日系コミュニティ内の文化に違和感や日本語を習得させられることに反発を覚えていたことも、日本への関心・興味の薄さに影響を与えた。

「日系人ちょっと変わり者だなと思ってたんですね。やっぱりC人ではないなと思って。父から日本語覚えなさいと、あんた日本人の顔してるから、でも、それと違うよね、理由が違うよね、将来に役立つからって言うてくれれば、日本人の顔してるから、何それって、っていう青春時代だったから。反発したかったでしょ、(中略)日系人って、日本人のむかしみたいな、昔の考え方なんですね。そしてうちの弟ずっと、日本語とC人の学校に行ってたから、うーん、父にしてみれば、日本語勉強してほしいっていうけど、私英語。英語学校に行くって、英語学校に行って、一切(日本語)勉強しなかったわけ」

そんな中、祖父の故郷であるB市を訪ねることとなる。B市にある親戚の家を訪ねた際、大好きだった祖父の話聞き、もっと話を聞きたい、日本語が話せるようになりたいと思ったという。また祖父の故郷であるB市に、当時働いていたD県とは違って親しみや懐かしさを感じたという。

「初めてB市にいて、お墓参りして、その実家の方にいったら、B市別世界だったね。D県とは、(違って)、(中略)すごく馴染みのある、あ、ここ私の家だなと思ったんですね。すごく不思議。

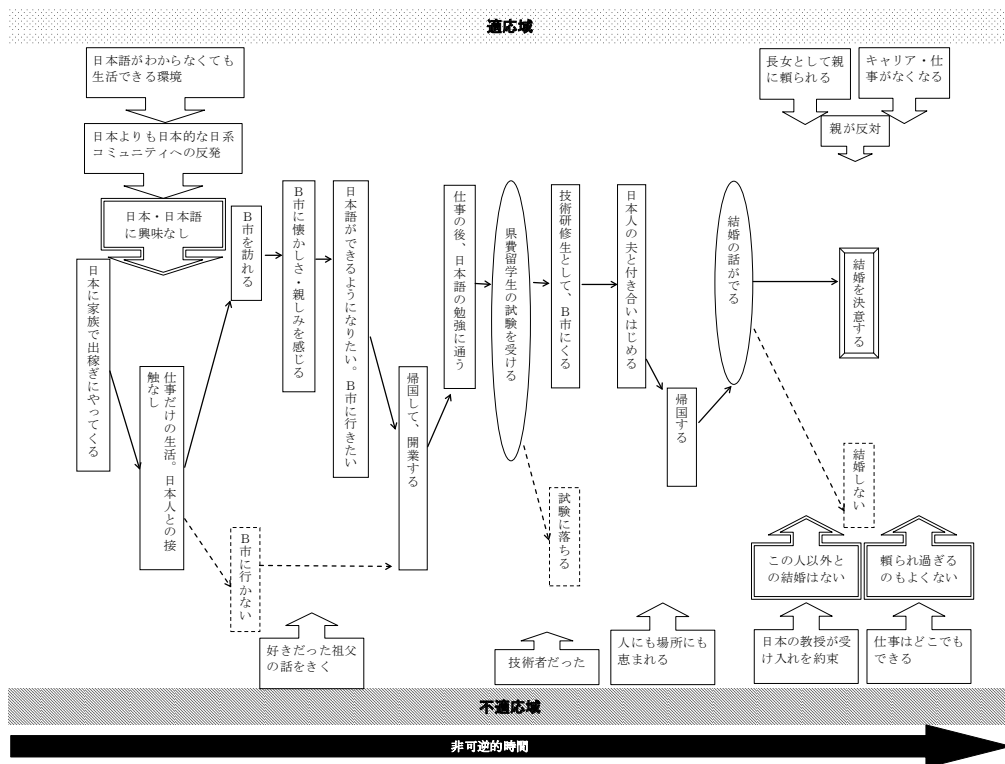


図1 第I期 来日から結婚まで

今でも私があの一、その気持ちは覚えています。すごく不思議な感じ。(中略) B市にきて、親戚の家行ってから、ここでは、日本語できれば、いろんなこと聞きたいわーって思ったんですね。初めて、人生のなかで、多分日本今まで私の人生の中での、日本とちょっとちがうなと思いました」

Aは祖父の故郷であるB市を訪れ、日本に対して関心が高くなっていったが、当初の目的通り開業資金が貯まったので、帰国して開業した。しかしながら、故郷B市に対する思いは強く、仕事の後、日本語の勉強に通っていた。そんな中、日系人向けのB市が位置する県費留学生の試験があり、合格し、B市に技術研修生として留学することが決まった。Aは、当時あまり日本語ができなかったが、技術職についていたことが合格の決め手になったのではないかと振り返る。日本での10ヶ月間の留学生活は、期待していた以上だったと語る。

「10ヶ月間はすごくよかったね。日本語勉強して、あそこ、ちょうどE施設の講座、日本語講座で、大学もだんだんと、良い先生に恵まれ、住んでいる所も友だちに恵まれ、もうB市は最高。＜普通は、期待してくると裏切られるものですが？＞そう、でも私思ったより、100倍増。さらに、ハズバンドも。全然そのつもりじゃなかったんですけれども」

留学中に日本人である現在の夫と付き合いはじめるが、留学期間が終わり、母国に帰国することとなる。帰国した後、結婚の話が出て、様々な迷いがあったものの、Aは結婚して日本に行くことを決断する。Aの気持ちとしては、現在の夫以外との結婚はありえないだろうという思いがあった。

しかし両親は反対した。Aは長女として、非常に両親に頼られていた。またせっかく母国で開業したのに、日本に行くには仕事を諦めなければならなかった。最終的には、日本の大学の先生が受け入れを約束してくれていたこと、仕事はどこでもできるという考えがあったこと、両親に頼られすぎるのもよくないと思ったことから、日本に行くことを決断した。

「まあ、それで全部たたんで、日本に嫁に来たって。やっぱり、一人娘、弟いるけど、(両親は、娘が)独身でずっといる、つもりだったので、プランニング何もなかったんですね。だから、それが大きなショック、ショッキング。親にとっては。(中略)ある程度の年齢になったときに、親が全部私に相談するタイプ、そして崩してしまったんじゃない。その構造。(中略)結果的、良かったと思うんですけどね。<Aさんがご両親に頼られてた感じですね?>頼られてた。だからそれもよくないねって思って。私の人生はもしかしたらここにいたら、もしかして決心、二つ選択があったのね。結婚したら全部なくなる、今までした勉強、キャリアここまできて、F大学の先生はドクターコース面倒を見てくれるって言うてるから。じゃあ、それもあるんじゃない。旦那もそれを応援して」

### 3 第Ⅱ期：結婚初期から人的ネットワークを広げるまで

第Ⅱ期は、結婚初期から人的ネットワークを広げるまでとし、図2に示した。

事業をたたみ、来日したが、受け入れを約束してくれた大学の先生が退職したことで、大学での

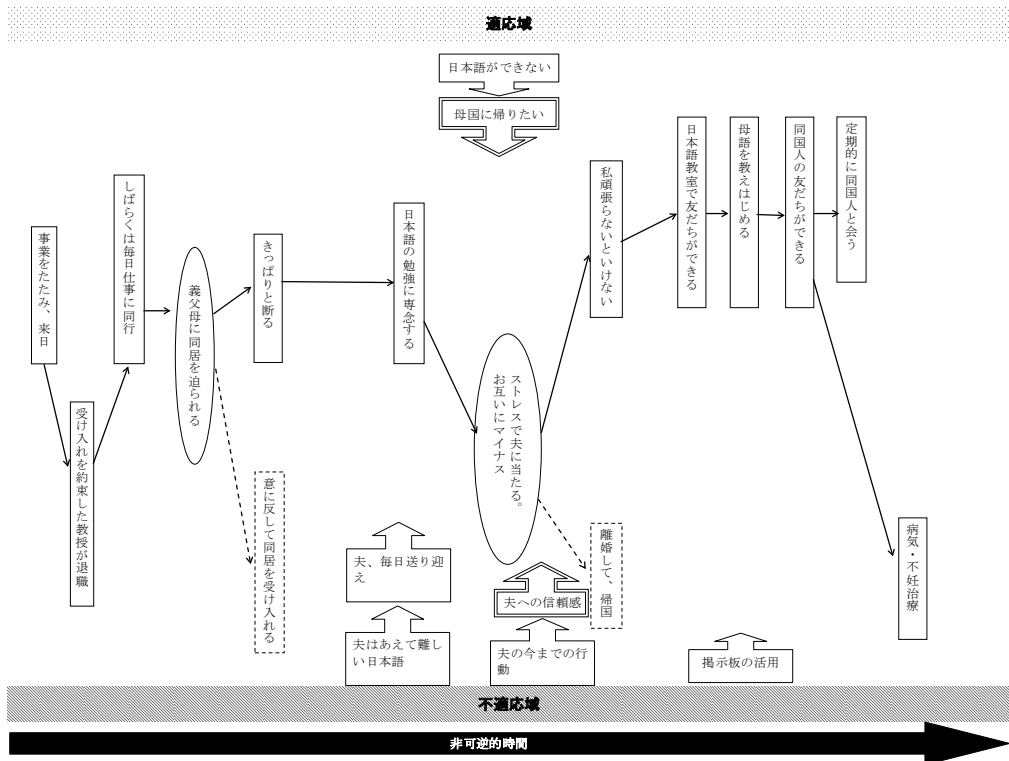


図2 第Ⅱ期 結婚初期から人的ネットワークを広げるまで



勉強は諦めることとなった。友人もいなく日本語もあまりできないAを気遣って、来日後しばらくは、自営業であった夫はAを仕事現場に同行させた。

「どっちかというとお父さんと仕事してたから、営業してたので、まあ、私あまり日本語できなくて、家にぼつんと一人でいるのもあれだから、毎日来て、毎日2ヶ月ぐらい毎日仕事に連れて行ってくれた」

結婚初期に義理の両親から同居を迫られたが、きっぱりと断った。初期の段階で、毅然とした態度を取ったことが後の親戚関係にも影響を与えたのではないかと振り返る。

「結婚して、最初私、腹黒くしていたんだけど、これは無理だなと思って、1年目でもう自分を。だって結婚して3ヶ月で、すぐ一緒に住んでくれないかって、次男なのに、私『絶対住まない、最悪だ』といったの。(中略)でもどこにでもある話。でも私すごく恵まれているのは、最初から、たぶん私ば一っと言っていたから、今は言わなくなった。(中略)一緒に住んでほしいといったときに、私『絶対住まない』って。お母さん『がーん』って。びっくりしたと思うのね。今は、良い関係に結びついて、(中略)たまにお茶こしたり、二人で」

来日して2、3ヶ月後には、日本語教室に通い始める。日本語教室の送り迎えを夫が毎日してくれたこと、特にAの日本語習得に夫は熱心だったという。

「日本語はじめて、毎回日本語のレッスン、あそこのG施設で勉強してて、迎えに来てくれてたんですね。それ、今はポイ捨てだけど、それだから、ケンカしてもこの人、情熱あふれてるなど、私についてじゃなくて、何かについての情熱。なんかすごいあるなって」

「彼は難しい日本語使っていたので、最初から。例えば、『私はあなたをどうの、こうの』って、最初はみんな日本人の旦那さんは優しいじゃん。うちの旦那は優しくないから、もう普通の会話、政治、それ分らないでしょ、わかるけど日本の分らないでしょ、(夫は)『じゃあ勉強しなさい』っていうのね。私はケンカできないわけ。『あんた(日本語)能力試験1級とったら、母語のラジオとテレビいれる』って。『あんた何考えてる、私はあなたの奴隷じゃない』、それから始まるのよね。奴隷という言葉、わからない。そして(夫は)新聞毎日読む人、だから(夫は)『政治とか経済とか読んでください。それで、勉強になる』。(私は)『嫌いなんです。C人新聞読まないのよ』、(夫)『読まない、読める関係ない。合格したかったら、それしかない』。それからケンカ始まる。ね。厳しい。優しくない」。

初期の頃は、言葉が分からないストレスや異国に来たストレスで夫へ当たることもあり、ケンカも多かった。お互いにマイナスの時期だったと振り返る。

「ここでは、もちろん私のストレス、夫に当たるということになったんですけど。ここにはたぶんうちの旦那さんもストレスになってたと思うんですよね。もちろん、受けるばかりだから。だから自分も変なマイナスになっていたと思う。お互いはマイナスになっていたと思う。けれども、どっちかというとなの方が強いというか、精神的な強さ、強いとおもったね。じゃないとたぶん、ここで離婚していると思うんです。離婚して、私母国に帰りたい気持ちがすごくあったので、あの一でもその、えっとそれより彼の前の段階の姿勢を思ったら、やっぱり私頑張らなきゃいけないと思ったんですね。そっちの方が多かった。〈夫の行動を見て?〉そうですね。今までたぶんそう」

大変だったけれども夫の行動、頑張りを思うと、自分も頑張らなくてはという気持ちになったという。日本語教室に通いはじめると、友だちができるようになり、ストレス解消になった。日本語が上達しはじめた1, 2年目に母語を教えたいと考え、掲示板にメッセージを貼った。外国人が多く集まる場所に、掲示板があり、そこには「外国語を教えます／習いたい」というようなメッセージが多く貼られていた。Aはそこにメッセージを張り出し、母語を日本人に教えることになった。またAへのインタビュー記事が載った地元の新聞をたまたま見た同国の日系人が、新聞社を通じて連絡してきたことで、同国人の友人ができ、婦人会のようなものを定期的開催していたという。

#### 4 第Ⅲ期：不妊治療

第Ⅲ期は、不妊治療に関わる時期として、図3に示した。

結婚して、1, 2年目に婦人科系疾患が見つかり、交友関係が広がりはじめた頃と同じ時期に、不妊治療もおこなっていた。Aは、不妊治療をしていた時期を振り返るととても辛く、同国人の支えが重要だったと話す。

「ここは、やはり友だちがいて良かったし、ありがたいことですし、なぜかという、ここで私感じたのは、(中略)日本でのこういった病気に関する、特に不妊治療、10年前、今はわからないですけど、あのちょっとタブーだったみたいね。不妊治療の治療してますよっていう、同じ日本人同

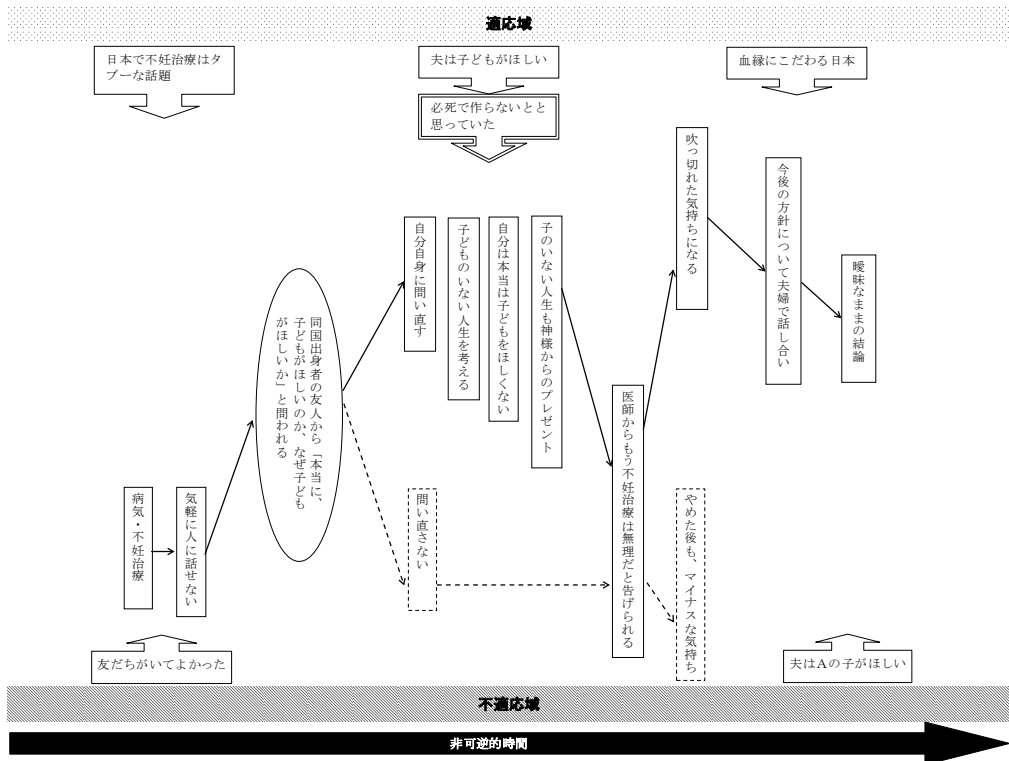


図3 第Ⅲ期 不妊治療

士で、日本人の友だち同士でも話せない雰囲気……。結構外国では、普通に誰にでも、知らない人でも『実は私、不妊治療しているわ』って。誰も隠さない。『うちの夫はできないから、うちの夫の問題』とか。知らない人にでも、初めてでも2回目でも言えるのね。それが気楽に、ある面で、なるのね。なります。日本でそこで、クリニックに通っても同じ立場の、待合室の、不妊治療者たちの、ほんとにもう、じっと、みんなひとりで抱えているみたいな感じで。だから、タブーだったから、それが私非常に良くなかったと思うし(中略)。私、それが辛かった。真剣なんだけど、なんていう、待合室で友だちもできなかつたし、同じ問題抱えている。(中略)もうみんな必死だったから、その雰囲気、すごい私嫌だった」

日本では、タブー視される不妊治療について同国人の友人たちと気軽に話せることが支えになった。また友人の言葉が、不妊治療に対する気持ちの大きな変化をもたらした。

「そのときに、婦人会のひとりのメンバーに、そんなに友だちじゃなかった人にそういった話してまして、もうずっとこのころの気持ち言ってたけど、だんだん治療最後になってきて、無理だなあって、精神的にすごく辛かったときに、まあでも仕事同時にしてたので、その友だちの一つの言葉で、私ちょっと目覚めたね。『Aはほんとの気持ち、このころの中でほんとに子どもほしいのかな』って聞かれたの。そして、『その子どもは、どうして子どもほしいか、ちょっと聞きたい』と言われたの。その二つの質問、ターニングポイントで、私無理してもこういったことを、無理しない、もしかして子どもいない生活は神様からのプレゼントじゃないかと思った。そしてやめた。ふーっと軽くなって」

友人の言葉を受け、子どもを産むことだけに必死になっていたことに気づき、自分自身の気持ちに目を向けることができた。

「家に帰って夫を見て、もしこの人と一緒に子どもできなかったら、私そんなに、悪い、なんていうんだろう、悪くないと思うので、後、生活もこれからあるので、離婚すればいいじゃないと思ったのね。そんなに子どもほしかったら。(夫は)すごく子どもほしかったし、イクメンになってると思う。(中略)もしかしたら、私子どもほしくないかもしれないし、この人のために無理しているんじゃないかって、あとは、私の中で、日本で子ども産みたくなかったと思う。だから体が反応していたと思う。日本語で、子どもとしゃべりたくなかったね。ずーっと母語で、母国の教育をさせたかった」

その後しばらく不妊治療を続けた後、医師からも無理だと告げられたときには、諦めることができた。養子を取るか、子どもを持たないか夫婦で話しあいをもったが、結論は曖昧なままだった。

「旦那さんと話したら、『私離婚する、大丈夫ですよ。あなたは、子孫残したい。』、日本人すごく子孫にこだわるから。私は、C(母国)にいたら(中略)養子取りたい。Cだれでもそれできるから、私はこだわらないからDNAに。自分の心に、気持ちを子どもに継がせたら、それで良いと。でも彼はそういった考えじゃないと。だから私外国にいて、卵もらって、私卵ないしね、卵子ないから。うちの旦那それも変だっていうのね。だからうちのCの義理の妹、弟の奥さんも、私たち経済的に子ども一人だけなので、『もしAがほしかったら、私の卵あげる』と。でもそれはダメ。第一ステップを踏み込まないから、それはそれでどうする?って。それが日本人の悪いところ、私は白黒はつきりつけたいのよね。グレーゾーン好きじゃないから。だんだんクレーズンになってくるから。

時間経って、今ではもちろんできないけど。今では。ちゃんとした話したけど。彼は多分、しょうがなく（現状）受け入れたと」

白黒はっきりつけたいAだったが、夫のAの血を引く子どもがほしいという気持ちを理解し、結論を出さないという状況を受け入れた。

### 5 第Ⅳ期：同国人とのズレから現在まで

第Ⅳ期は、同国人との間にズレを感じ、自分らしく生きることを考えはじめから現在に至るまでとした（図4）。

年数を重ねるうちに、Aは子どもをもつ同国人たちとの間にズレを感じるようになったという。Aには、同国の友人たちは子どもがいることで日本社会に合わせようと必死になっているように思えた。次第に母国や日本に対する考え方にズレが生じてきたという。そこで、Aは日本に無理してあわせるのではなく、自分らしく、外国人として日本で生きていこうとする。

「日系人同士でなんとなく心と心通じ合うんですね。ある意味、全くのC人より、だからそれもやりやすかったんですけど、これまあ言うのも失礼かもしれませんが、だんだん、年数が、日本に住む年数が高くなると、彼女たちはやっぱり日本人の子どもいるから、私の考え、（中略）彼女たちは違うんです。（中略）私自身、それで、その彼女たちの生活の仕方、子どもいるからやっぱり、過

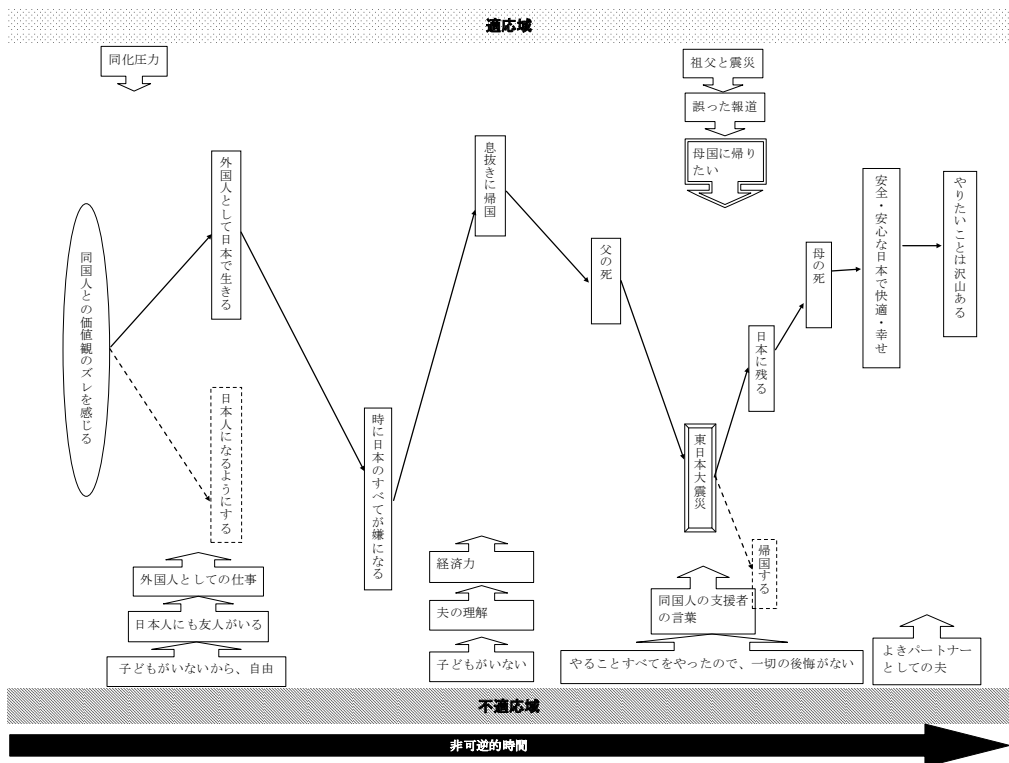


図4 第Ⅳ期 同国人とのズレから現在まで

ごし方、やっぱり子ども居るから必死ですよ。子どもいるってことは。だから、それ私は、言うこともないけど、私から見れば私自分で、ちょっとなんか、ズレ。これは、ちょっと違う。私そこまで日本人にならなくていいんじゃないかって、いうところ、ちょっと出てきて、(中略)やっぱりズレ。考え方のズレが、私も同じくらいC好きで、Cを否定することができないんですよ。だから彼女たちは、それをちょっと、私は外国人じゃないような雰囲気、なんか、日本人の顔してるから、でもこれ変じゃん。(中略)たぶん子どもいないからじゃないかって思うのね。私の考え、やっぱり学校で、いじめられるの怖いからっていうの。なんか『外人の、C人のお母さんおかしいね』って言われるの。(中略)けっこう神経質なのよ。余裕がないのよね。彼女たちにも。こっちにも影響してしまうし、こっちも変な考え、(中略)だからちょっとやっぱり、うん、距離をもった方がいいかなって、じゃないと日本人より日本人になって、変なところまで気をつかわないといけないなって。めんどくさいのよね。私まあ、それをちょっと、自分は自分のペースで、自分の仕事、できることを普通に、C人、(中略)私は日本人ではないですよ。そこまで、期待しても、言い訳かもしれない、外人だし、じゃないと自分で自分を失ってくるんですよ。失ってくるとダメだなあとって」

Aは、そのような自由な選択ができるのは子どもがいないからだとしているが、これまで外国語を教えたり、通訳をしたり、外国人であることを活かして仕事をしてきたことの影響も大きい。またそういった仕事のつながりを通して、同国人だけでなく、日本人や他の外国人とも繋がりを持っていた。図らずも、同国人同士のつながりではなく、日本社会とのつながりがAらしく、外国人として日本で生きることを気づかせた。

「母語を教えることによって、友だちが増えたんですよ。日本人のお友達。そして、やっぱり日本人の友だち増えると、いろんな人と話せるんですよ。そしていろんな意見、いろんな考え方、どうして日本ってこんなことあるかって、どうしてあんなことあるかとか、私の主人以外の人としゃべることができて、視野が広がるんです。そして、まあ一つの、ここだけの、家族だけじゃなくて、ちょっと広がって、良かったと思う」

「そのとき(母語を教えはじめたとき)日本人の友だちいっぱい作ったじゃないですか。だから自分は日本人にならなくてもいい。自分は自分。自分は自分なりに生きていけばいいから、逆に日本人の友だちから教えてもらったと思う。このC人だけでいけば、たぶん私日本人にならないといけない、ならないといけない、っていう気持ちあったかもしれないね。あとここは多分状況も違うんですね。私子ども産んでなかったから、ここは気楽なの。子どもいれば親が何でもするんじゃない。自分を殺すまで。私それがなかったと思うから、それはいいかどうかかわからないけどね」

日常生活に慣れていても、小さなストレスが溜まって、ときに日本のすべてが嫌になるときがあるという。そういうときは、Aは息抜きに帰国する。このようなことができる背景には、子どもいないことで時間の制約が少ないこと、経済力や夫の理解がある。

その後、両親の死や東日本大震災を経て現在に至る。両親の死では、自分ができることのすべてをやったので一切の後悔がないという。

「親と離れて、私一切なんにも後悔してない。病気になった父親に全部お金送ったし、何もできな

かったから、仕事してお金送り、何回も年に一回でも行ったし、お金莫大送ったでしょ。だからありがたい、ありがたい。何も残らない。親に。ちゃんと母親、『あんた偉い』って言われて。うちの母亡くなる前に、もう足歩かなくても、飛行機で、莫大なお金うち払ったけど、連れてきて、私の生活見せたのね」

また東日本大震災では、情報が混乱する中、母国で誤った情報が伝えられ、親戚から帰国するように強く要請されたが、当時はその情報の真偽を判断する術もなく、不安に駆られた。さらに、祖父が関東大震災をきっかけとして、Cに移民したことで東日本大震災を重ね、運命的なものを感じ、帰国したい気持ちが強かったという。しかしながら状況が許さず、落ち込んでいたところ、同国のボランティアの言葉が支えとなり、日本に残り自分にやれることをやっという決意した。

今は、安全・安心な日本で快適に暮らせて幸せだと思うが、一方で落ち着いてしまいたくない、もっといろいろなことをやりたいという気持ちもある。おそらく老後は日本で暮らすことになると思うが、まだ日本に骨を埋める覚悟はないという。50才を過ぎて、体調や体力を考えながら、可能性を捨てずに、日本と母国両方に関わることに携わっていきたいと意欲的に語った。

### Ⅲ 考察

Aの異文化適応過程について、阻害要因と保護要因に着目しながら考察をおこなう。

第Ⅰ期の出稼ぎから結婚では、はじめAは全く日本に関心を抱いていなかった。小内(2003)は、エスニック・コミュニティの発達や労働形態の特徴から、日系ブラジル人たちは、日本人と交流しなくても生活できる環境が整い、労働や生活の場面でセグリゲート化が進展していると指摘する。Aの場合も日本語がわからなくても生活できる環境にあったこと、日系社会への反発がより日本への関心を薄くし、阻害要因になっていったと考えられる。しかし祖父の故郷を訪れたことをきっかけに、日本への関心が高まっていった。はじめ出稼ぎにきたD県とB市の対比がよりB市の好印象を強めることになった。出稼ぎを終えて帰国した後、日系人向けの研修制度があったこと、技術者であったことが再び留学をするきっかけと作った。留学中は、県人会のサポートや日本語指導、フォーマルなサポートとインフォーマルなサポートがあったことが、Aの留学生生活を想像以上のものにし、保護要因として働いていたと考えられる。結婚には、様々な葛藤があったものの、最終的に自ら決断し来日した。

第Ⅱ期は、結婚初期から同国人・日本人とのネットワークを持つまでである。帰国を前提とした留学とは異なり、この時期は日本に定住することを前提としている。そのため、より高いレベルの日本語能力が求められる。日本語があまりできず、友人もいないことは、Aにとってとてもストレスフルな状況であった。このような苦境を乗り越えられたのは、夫がAのストレスを受け止めていたこと、またケンカはしても夫が行動でAを支え続けたことが背景にある。桑山(1995)は、日本の農村の嫁いだ結婚移住女性の家庭内におけるストレスとして存在感のない夫を挙げている。それは対照的に、夫がAのストレスを理解し、行動で支えたこと、またAも夫の行動を評価していたことが苦境を乗り越える保護要因となった。さらに日本語教室に通いはじめたことで、同じような立場

の外国人や日本人との関係が築かれていった。自ら外国語を教えることで、Aの社会関係はさらに拡大した。この時期に、築いた人的ネットワークは、Aその後の日本で生活する上で重要な意味を持つこととなった。日本語が不慣れなこと、友人などの家族以外のネットワークがないことが初期の適応の阻害要因であった。一方、夫の支え、日本語が上達するにしたがって社会関係を拡大できたことが保護要因として働いている。

第Ⅲ期は、不妊の問題に取り組んだ時期である。不妊に関する母文化と日本文化の違いが、衝突していた時期と捉えることができる。実際の不妊治療だけでなく、不妊治療を非常にデリケートな問題として捉える日本の風潮にAは、強いストレスを感じていた。そんな中、同じ文化を共有する同国人にオープンに話せていたことが支えとなった。またそこから、自分の気持ちを見つめ直すきっかけを得ることもできた。Aの妊娠が不可能であるとわかった後も、養子をとるか、海外で何らかの対処をおこなうか子どものあり方について、夫と対立する。夫は、Aの血にこだわった。Aは、白黒はっきりさせたかったと言いつつも、最終的には夫の気持ちを尊重した。日本人だから血にこだわるのではなく、Aの血を受けついた子どもにこだわっていることを理解したからである。不妊治療、養子や人工授精といった子のあり方に対する文化的差異が阻害要因であった。しかし価値観を共有する同国人に気持ちを受け止めてもらえたこと、また話し合いの結果、日本の文化として血にこだわっているではなく、夫個人の気持ちとして理解できたことが保護要因として働いた。

第Ⅳ期は、同国人とのズレを感じ、日本での自分の生き方を模索していく時期である。日本で子どもを産み、育てていく中で、次第に日本的になっていく同国人に、Aは違和感を感じるようになった。日本で子育てをする人にもそれなりの事情があると理解しつつも、自分の生き方とは違う、自分は日本の中で自分らしく、外国人として生きていくという想いが強くなっていった。そして同国人との付き合いは、以前ほど頻繁ではなくなっていった。しかしながら、一方で仕事などを通じた日本人とのつながりが広がっていた。また時間的制約や経済的余裕があったことから、ストレス解消に帰国したり、自分の両親への経済的援助など後悔なく親孝行することができた。この時期は、同じ価値観や文化を共有していた同国人とのズレが生じるという危機的な状況がある一方で、日本社会の中でこれまで築きあげてきたネットワークが保護要因として働いていた。また時間的制約が少なく、仕事をしていることが、自由に帰国や親孝行をできる背景にあった。

第Ⅳ期は、子どもがいる場合といない場合で、大きく分かれる時期である。異文化での出産や子育ては、学校教育や母親同士の付き合いなど必然的に日本社会と関わるざるを得ない。母親となった結婚移住女性は、困難やストレスがありながらも、保育所や小学校で社会的ネットワークを広げる機会を得ることができる(武田, 2011)。一方Aの場合には子どもおらず、上述のような機会はなかった。しかしながら日本語教室や仕事を通して、日本人や他の外国人とさまざまな社会関係を築き上げてきたことが、日本という異文化社会の中でAがAらしく生きることの保護要因になったと考えられる。当然のことながら、そのような社会関係の背景には、高い日本語能力と人間関係を構築するコミュニケーション力があることも忘れてはならない。Aの日本語学習への努力や掲示板に広告を出すといった積極的な社会参加なしに、このような家族外の社会関係は成立しにくい。また

自身の異文化性を強みとして仕事を展開することができたことは、異文化に合わせるだけでなく、自身のルーツやアイデンティティを保持していくことに役だったと考えられる。

Aの事例を通して、子どもを通じた日本社会との関わりはないものの日本語学習や仕事など様々な機会を通じて社会関係を構築していることがわかった。またこのような社会関係が日本社会での居場所や社会参加に影響していることが明らかとなった。

### Ⅲ 本研究の限界と今後の課題

本研究は、1人の結婚移住女性のライフストーリーを対象としたものであり、一般化するには限界がある。またAの事例では、異文化性を強みにできたことが、社会関係の構築や社会参加に影響を与えていたと考えられる。今後は、さらに多くの事例を集めて、社会関係の構築や社会参加の影響因について検討していきたい。

#### 【付記】

研究にご協力いただきましたAさんに深謝いたします。また本研究は、公益財団法人上廣倫理財団、平成26年度研究助成を受けました。心より感謝申し上げます。

#### 【引用文献】

- Berry, J. W & Kim, U (1988). Acculturation and mental health. In P.Dasen, J. W. Berry & N. Sartorius (Ed), *Health and cross-cultural psychology*. London:Sage pp.207-236.
- 厚生労働省 (2015). 夫婦の国籍別にみた年次別婚姻件数. (平成27年9月3日) < <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001137969> > (2016年3月14日取得)
- 法務省 (2006). 平成17年末現在における外国人登録者統計について. (平成18年5月) < [http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press\\_060530-1\\_060530-1.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_060530-1_060530-1.html) > (2016年3月14日取得)
- 法務省 (2016). 平成27年末現在における在留外国人数について (確定値). (平成28年3月11日) < <http://www.moj.go.jp/content/001178165.pdf> > (2016年3月14日取得)
- 橋爪きょう子・小島秀吾・佐藤親次・糞下成子・浅川千秋・森田展彰・中谷陽二 (2003). 在日外国人女性の精神鑑定例—異文化葛藤要因としての出産・育児— 犯罪学雑誌, 69, 36-43.
- 許 莉芬 (2010). 異文化適応からみた在日外国人のメンタルヘルスに関する研究—久留米大学病院を受診した外国人花嫁の事例を通して— 比較文化研究論集, 25, 17-27.
- 井上孝代 (2001). 留学生の異文化間心理学—文化受容と援助の視点から— 玉川大学出版部
- 一條玲香 (2015). 在住中国人女性の異文化適応における困難とサポート要因—日本人と結婚した中国人女性のPAC分析を通して— 心理臨床学研究, 33, 59-69.
- 桑山紀彦 (1995). 国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族 明石書店
- 落合恵美子・カオ リー リャウ・石川義孝 (2007). 第11章 日本への外国人流入からみた国際移動の女性化—国際結婚を中心に— 石川義孝 (編著) 人口減少と地域 京都大学学術出版会 pp.291-321
- 小内透 (2003). 在日ブラジル人の教育問題—群馬県太田・大泉地区の実態をふまえて— 駒井洋 (監修)・石井由香 (編



- 著) 移民の居住と生活 明石書店 pp.216-233
- 大野順子(2013). 多文化社会におけるシティズンシップ形成に関する一考察—移民・移住女性の語りから— 多文化関係学, 10, 3-17.
- 大友健・飯田順子(2016). ラテンアメリカ系ニューカマーである母親の日本への適応過程 こころと文化, 15, 66-76.
- Radloff, L. S. (1977). The CES-D scale: A self-report depression scale for research in general population. *Applied Psychological Measurement*, 1, 385-401.
- 賽漢卓娜(2011). 国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性— 勁草書房
- サトウタツヤ(2015). 複線経路等至性アプローチ(TEA) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編) TEA 理論編—複線経路等至性アプローチの基礎を学ぶ 新曜社 pp.4-8
- 鈴木一代(2012). 異文化間心理学へのエントランス—多文化社会と心理学へのアプローチ— おうふう
- 田垣正晋(2009). 第5章 第3節 ライフストーリー研究からみた TEM サトウタツヤ(編著) TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして— 誠信書房 pp.138-144.
- 高井次郎(1989). 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育学部紀要:教育心理学科, 36, 139-147.
- 武田里子(2011). ムラの国際結婚再考—結婚移住女性と農村の社会変容— めこん
- 譚 紅艶・渡邊 勉・今野裕之(2011). 在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望 目白大学心理学研究, 7, 95-114.
- 安田裕子・サトウタツヤ(編著)(2012). TEMでわかる人生の経路—質的研究の新展開— 誠信書房
- 安田裕子(2015). まえがき 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編)TEA 実践編—複線経路等至性アプローチを活用する 新曜社 pp. i -iv.

# The Cultural Adaptation of a Woman Who Married and Moved to a Foreign Country (Japan):

A Case Where the Woman Remained Childless

Reika ICHIJO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Takashi UENO

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

This manuscript reports the life story of woman “A,” who spoke of her marriage, move to a foreign country, consequential fertility treatment, and final choice of a childless life, and clarifies her cultural adaptation process. During her fertility treatment, she received the support of fellow nationals, who shared woman A’s feelings, with an understanding framed by their shared cultural values. With the passage of time, however, as her fellow nationals raised children in Japan, there occurred a divergence between the value perspectives of these nationals and those of woman A. While she becoming gradually estranged from her fellow nationals, through her Japanese language classes and work, she forged a robust network with Japanese people and people from other countries. Finally, woman A chose to live in her own way, have her own lifestyle, as a foreign person residing in Japanese society.

Woman A thus presents a case of an individual who, despite the lack of connections with Japanese society that could have been possible through having children, constructed a network within her surrounding milieu; this network had an impact on her adaptation to Japanese life and her participation in society. Further, it was not only ties with her fellow nationals but also her relationships with Japanese persons that were linked with her ability to have her own lifestyle as a foreign person residing in Japan

Keyword : Marriage immigrant, cultural adaptation, spouse of Japanese national, international marriage, fertility treatment.